つゝある世界史の問題に就て觸れられる處は、最後の「世界史と日本の使命」の最初の部分に留まり、本書を通じて讀者は、其卓見を充分に知る事は出來難いけれども、然し此書に收むる處の諸論篇悉くが、新しき世界史を創らんとしつゝある、吾々に示唆する處大なるものあるは信じて疑はざる處である。

蓋し、著者擇ばれし處の論題は、所謂歴史的なものゝみではあるけれども、然し其等は、世界的日本が、今日切に解答を要請しつゝある問題と緊密に繋るが故であり、又其解決其物が、唯徒らに懐古趣味を滿さんが爲の史實探究にのみ終始してはゐないからである。

此紹介の出る頃、恐らく讀者は、爽涼の氣滿つる燈火の下其麗筆の跡を辿りつゝ「政治家の理想」、「外交」の要諦は如何ある可きか等々の諸問題に就て、他遙歴史を通じて具體的に教示せらるゝ處洵に多大なるものあらうが、就中私は、歴史に於ける自由と必然の關聯を說ける「イアペトスの一族」、及び、現下愈々重要性を增しつゝある石油、鹽の歴史的意義の展開を敎ふる「燃ゆる水」、「鹽」等の諸篇の中に、特に著者の優れたる見識と叙述の筆を見出して敬服せる者、唯私一人のみではない事を確く信ずる者である。

（定價貳圓五拾錢、創元社發行、西井克巳）

獨逸中世史研究

上原專祿著

ドイツ中世史に關する七篇の論文から成り立つものであるが、大別すれば史料研究的なものと問題研究的なものとが略々相半ばしてゐる。中世史料の文獻學的研究は、殆んどその過程から十九世紀の歴史學が生長してきたといつてもいい程、奥行の深いものでありまた範圍の廣いものであるけれども、わが國においては種々なる事情から、就中研究上の技術的困難の大きい潮合に歐米人のそれに對比しうるだけの結果を擧げ難いといふ點から、學者が自ら進んでこの難路に踏み入つて目に見えない地下の作業に從事するといふことは極めて稀であり、現にそのような作業をするために必要な準備勉强さへも充分に出來てゐないといふことが遺憾乍ら現在までの實狀である。この點本書の著者上原教授は誠に異色ある存在といふべく、夙に維納のドプシュ教授の下において中世史料學の研鑽を積まれ、歸朝後中世史料の根本についてその譯譯並に研究の事業を起され、その成果を勝寫版刷にして諸大學の研究室に配布せられるといふ如き辛酸たる勞苦を續けられ、誠にその志の實ならざることは後進の徒をして感奮せしむるものがあつた。本書に收められたものは恐らく斯の如き教授多年の研究の一部分にすぎないものであらう。而もこの種の史料研究は極めて少數の專門家の間に理解せられるに止つて、一般の興味を喚ることは望み難いことであるかも知れないけれども、教授の學風を最もよく傳へるものとしては本書に收められた「コーデックス・ラウレスハメンシス」以下の三篇は特筆せらるべきところであらう。先に本誌に紹介した久保正幡氏のリヴアリア法典の譯譯研究等と

相俟つて、最近の日本において、篤學の士によつて中世史料の研究が着實に進められつつあることは注目したければならぬ。特にこの種研究がわが國において甚だ出版に困難なる事情から考へて、刊行物を通して吾々の眼に觸れるものは恐らく研究業績の一端にすぎないものであらうことを思へば、わが國の中世研究も近來意を強くせしめるに足るものがあるといへよう。

本書の中で問題研究的なものとしては、「古ゲルマン民族の國家生活」、「傳カール大王御料地令文獻考」、「封建制度研究における一傾向」、「中世獨逸における國家統一の問題」の諸篇であるが、それらの各篇について逐條解說檢討することを紙幅が許さないことは遺憾であるが、これらの諸篇の間に論理的な聯關と統一とは認められないにしても、各篇がそれぞれに現下の中世研究の新新にして且つ核心的なる問題に觸れ、而も問題の定位が甚だ確實であつて研究の歷史並に學說の本流支流に通徹し、最新の學問水準に立脚して零細なる文獻をも忠實に顧慮し、論斷は概して控え目に嚴正を持して學問の正道を固持し後進をして謬らしめない態度は敬服すべきであるといはなければならぬ。例へばカール大帝御料地令(Capitulare de villis)の研究は今世紀の始めドプシュの劃期的なる研究によつて學界に未曾有の波紋を投じ今世紀の社會經濟史研究の出發點を劃した問題であつたが、著者はドプシュ以後の研究を一括して研究史上に更に一歩を進め、その恩師に當るドプシュ教授に對しても嚴格なる批判的態度をもつて臨んでゐる。「中世獨逸における國家統一の問題」もフォン・ベローの中世國家論以來の形式主義的法理論的中世國家論の行詰りを打開すべき時期に際して著者の論旨が示唆を與ふるところが甚だ大いと思はれる。

本書に收められた諸篇は悉く政治、社會、經濟に關するものであつて精神史については全く觸れられてゐない。然し著者は東京商大の教授であるとはいへその行き方は所謂狹義の經濟史家とは全く異つたものであるといふことは最も特筆すべき點であらう。即ち所謂經濟史家が常に經濟理論によつて見方を拘束せられてゐるのを常とするのに反して、著者は殆んど何等の理論を前提せずして常に史料から出發し、その領域もまた敢へて經濟に局跼せずむしろ政治經濟の相關の中に歷史を見んとするものの如くである。最後に一言したいことは本書の諸論は必ずしも落着くべき結論に達せず却つて場合によつては新しき問題を提起し發見せしめることに終つてゐる點が尠くない。それは本書の缺點でなく却つて學術的價値の高いことの證據であるが、然しこれら未解決の點に關して更に第二第三の論文集が現れることを吾々は學問の發展のために待望して止まないものである。(弘文堂發行、B5版、三三〇頁、定價四圓參拾錢)(鈴木成高)

政治史の課題

中山治一著

「國家把握の問題が、單なる學問的關心にのみかゝはる事柄でな